

前回個人研究発表まとめ

「哲学的意味論における文脈主義と相対主義
——不一致の取扱いをめぐって——」

鈴木 慧（本学社会学研究科修士課程）

本発表は、分析哲学領域における文脈主義-相対主義論争の中の、1 論点である不一致 disagreement をめぐる議論に寄せて近年文脈主義陣営の側から提出されてきている文脈主義にとって有利な諸論証に注目し、これに対し批判的議論を展開した。

近年、分析哲学領域では、発話文脈の諸特徴に依存して外延を変化させるように見える言語表現（時制文・趣味述定文・道徳文等々）に対しいかなる意味論的取り扱いを与えるべきかをめぐり、文脈主義という立場と相対主義という立場との間に論争が展開されている。この論争は、Recanati (2007) や Kölbel (2015) の整理によれば、ある言語表現の外延が発話文脈特徴に依存して変化するという現象を、その言語表現の内容 content が発話文脈の諸特徴に依存して変化することの帰結として説明するのか（文脈主義）、それともその言語表現の不変の内容が評価環境内の諸パラメタに相対的に外延を変化させることの帰結として説明するのか（相対主義）という 2 立場間の対立である。

この論争での 2 陣営間の係争点は複数存在するが（cf. MacFarlane 2014; Kölbel 2015）、その中でも主要ものの 1 つは、不一致を呈しているように見える対話の取り扱いというトピックである。複数の相対主義者たちは、「趣味述定文等についての文脈主義意味論は、対話参加者のうち的一方が「否」等の「不一致マーカ―」の使用を許容されているように見える対話を、不一致マーカ―の使用が許容されないように見える対話と意味論的等価であると予測しなければならない（それゆえ、文脈主義意味論は趣味述語等に関して誤りである）」という類の文脈主義反対論証を提起してきた（Kölbel 2004; Lasersohn 2005; MacFarlane 2007）。だが、この論証に対しては近年、文脈主義陣営から次のような応答が提出されてきている。すなわち、「文脈主義者は、趣味述定文等を用いた対話を、不一致マーカ―の使用を許容されるような対話と意味論的に等値するような予測を与えることもできる（したがって、相対主義者による上記様の文脈主義批判は当たっていない）」という応答である（Sundell 2011; Huvnes 2012）。

本発表では、文脈主義-相対主義論争における不一致というトピックをめぐり近年における上述のごとき議論の進展を背景に、次のような主張を行った。すなわち、近年の Sundell (2011) および Huvnes

(2012) による文脈主義に有利な 2 応答は、相対主義の比較優位を突き崩すものではない。この主張の論拠を挙げるべく、発表者は、Sundell (2011) と Huvenes (2012) が「x はおいしい」のような趣味述定文について提案している意味論的同一視に問題があることを指摘した。すなわち、彼らは当該趣味述定文を、それぞれ「x は私とあなたとが共有する趣味基準においておいしいとされている」(Sundell)、および「私は x を好む」(Huvenes) と意味論的におおむね同一視するが、その同一視には問題がある。このことを発表者は、いくつかの事例を挙げて論証した。

上記発表内容に関して、会場からは次のようなコメントを頂戴した。すなわち、Sundell (2011) の論は発表者が指摘した点以上に、「立ち聞き事例」の処理にまずは難渋するのではないか、というコメント、また、趣味述定文等の外延が可変的であるという現象は、文脈主義でも相対主義でもなく、何らかの非命題主義的な意味論によってこそもっともよく説明されるのではないか、といったコメント、等である。これらのコメントを通して、会場での討議では、発表者の議論の暗黙の前提や見落とし・限界がより明らかなものとなった。